

内湖を活用したホンモロコ種苗放流魚の琵琶湖における漁獲状況

岡本 晴夫・氏家 宗二

1. 目的

琵琶湖の周囲に点在する内湖は、かつてはフナ、モロコ等コイ科魚類の産卵繁殖場として、また、仔稚魚の育成場所として機能していた。しかし、現在の内湖は、オオクチバス等の外来魚の繁殖と在来魚の減少により、その機能は低下していると考えられる。そこで、内湖が本来持つ在来魚類の育成機能の回復を目的として、県内最大の内湖である西の湖において、排水が西の湖へ流入する水田にALC耳石標識を付けたホンモロコのふ化仔魚放流を行い、その後の琵琶湖内での分布について調査を実施した。

2. 方法

西の湖に隣接し排水が流入する水田に、ALC耳石標識を付けた2日齢のホンモロコの仔魚を収容し、約1ヶ月間育成後、水田の中干し時に体長約2.3mmの稚魚を2.6万尾を流下させた。10月以降、琵琶湖において、これら標識魚の動向を把握するため、刺網(10~12月)や沖曳網(2~3月)による漁獲物サンプルの標

識確認を行った。

3. 結果

10月から12月の刺網漁獲物サンプルの標識確認を行ったところ、琵琶湖北湖南部で3尾と多く漁獲され、東岸および中央でも7尾漁獲されている(図1)。また、2月から3月の沖曳網漁獲物サンプルでは、北湖の広い範囲で3~4尾の標識魚が漁獲されており、冬期には天然魚と同様に北湖の深みに移動しているものと考えられる(図2)。なお、漁獲された放流ホンモロコの体長は、同時に採捕された天然魚と有意な違いはなかった。

これらの結果から、西の湖近隣の水田に収容され、中干し時に西の湖へ流下したホンモロコは、琵琶湖北湖の広い範囲に分散していること、成長は天然魚と遜色がないことがわかった。

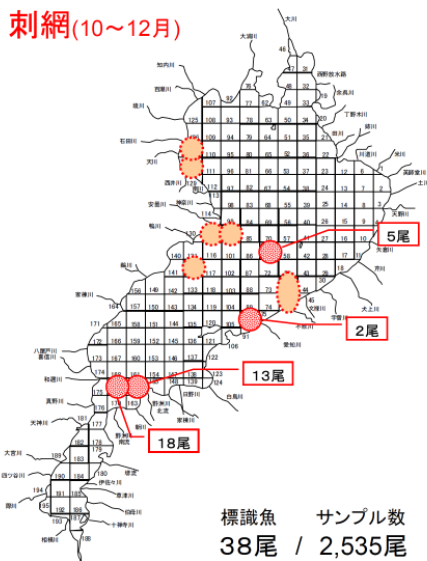


図1 刺網漁獲物の標識魚の分布

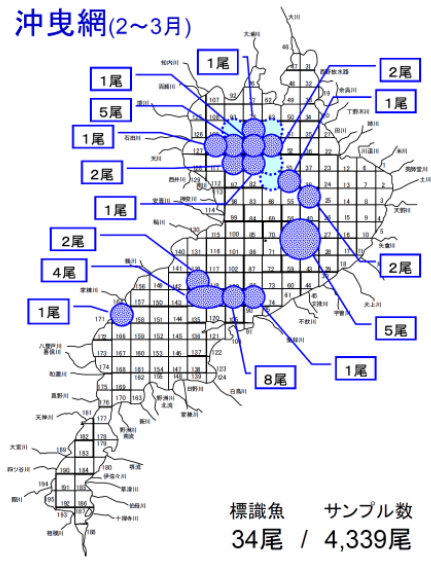


図2 沖曳網漁獲物の標識魚の分布